

## 第IV部門

## 遊興空間としての参詣道に関する研究 —江戸後期の円山・祇園・下河原・八坂・清水地域を対象として—

京都大学工学部 学生員 ○大住 由布子  
 京都大学大学院工学研究科 正会員 樋口 忠彦  
 京都大学大学院工学研究科 正会員 川崎 雅史  
 京都大学大学院工学研究科 正会員 出村 嘉史

## 1. 研究の背景と目的

本研究の対象地域である円山・祇園・下河原・八坂・清水の一連の地域は時代を問わず、多くの観光客を集め続けている。その要因には、この地域の魅力が有名寺社などの名所だけにとどまらず、地形や景観を含めた領域全体に備わっていることが考えられる。

本研究では、多様な空間が重なることにより、一つの魅力的な景域が構成されることとはどのようなことなのかを考えるために、文化の円熟期である江戸後期の円山・祇園・下河原・八坂・清水地域（図1<sup>1)</sup>）を対象にして、それぞれの場における遊びの存在とそのための装置や、大きな景域の空間構成について明らかにした。

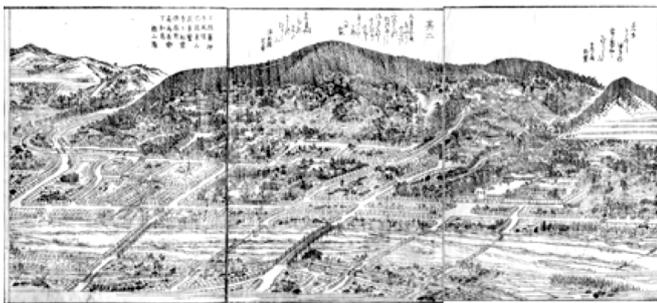


図1 近世後期における対象地域

## 2. 参詣道沿いの町の発達

近傍に交通の要所を幾つか抱えていた対象地域は、古くから多数の参詣客で賑わっていた。本研究では、まず始めに対象地域が遊興地として成立するための基盤となった新町開発について、古地図や文献等の歴史資料をもとに分析した。

対象地域では江戸前期のうちに核となる門前町が成立し、それらは茶屋や旅籠屋の並ぶ遊興地として機能していた。江戸中期になるとそれらの核となる門前の間を埋めるような形で、祇園社南部や栴屋町において新町開発が行われた（図2）。これらの町の開発は領

主であった寺社主導で行われる以外に、地面開発人と呼ばれる人々によって行われることも多く、開発後の新町は茶屋街の一部となった。ここからは、江戸後期までに遊興空間を繋ぐ形で参詣道沿いの町が発達していったことが推察される。



図2 対象地域の新町開発

## 3. 遊興空間の分析

本研究では対象地域の遊興の空間を、寺社における宴の空間と参詣道の空間との大きく二つに分類して分析を行った。

寺社における宴の空間としては、時宗寺院の空間と花見の空間の二つを、主に絵図を用いて空間要素の相対関係、地形構成を読み取り、文献史料の分析とあわせて人々と空間との関係を明らかにした。

対象地域内の時宗寺院の塔頭は、『花洛名勝図会』等を分析することにより、自然と一体となった庭園と連続して建物が設けられ、傾斜地に立地していたことを利用し、庭園や建物からの眺望を愉しむことができ

る空間構成となっていた。

時宗寺院と花見の空間に共通する性質として、双方ともが開放的な装置を用い、外部の事物と一体となろうとする方向性を有していたこと、また視対象（花や庭など）がそのまま場を形づくる装置に転換しうるような空間構造であったことが挙げられる。また双方とも老若男女問わず誰もが気楽に愉しめる性質を有しており、しばしば酒肴や舞・音楽を伴った(図3<sup>2)</sup>、図4<sup>3)</sup>)。そしてどちらも主に寺社境内という都市計画の外におかれた場が、公衆に広かれた非日常の遊興の場として機能していたことが特徴的であった。

参詣道の空間としては、沿道空間として茶屋街と清水門前を、また参詣道の性質を有する野原としての真葛原を分析した。これらに共通する性質として、参詣道のなかの各空間の領域（公共空間と私的空間）の曖昧さがあることがわかった。一方で二つの相違点として、道はある一定の方向性しか有さないのに対し野原は任意の方向に向かうことができるという点において、アクセスの多様さの違いがあることがわかった。これらから、参詣道には本来の役割である名所と名所を繋ぐ役割と、異種の領域同士を繋ぐ役割の、二種類の役割があることがわかった。

さらに門前町や時宗寺院、茶屋街など多種多様な遊興の要素が混在していたこの地域を、訪れる人々に一つながりの空間として認識させていた要素として、二軒茶屋と産寧坂の分析を行った。これらは異種の要素間や地形の変化する部分に存在した繋ぎの空間であり、その繋ぎ方も二軒茶屋のように賑わいによって別種の空間を繋いでいたものから、産寧坂(図5<sup>4)</sup>)のように景観・地形の面白さや文化的な側面によって繋いでいたものまで、様々な性質のものがあることがわかった。



図3 時宗寺院における宴席

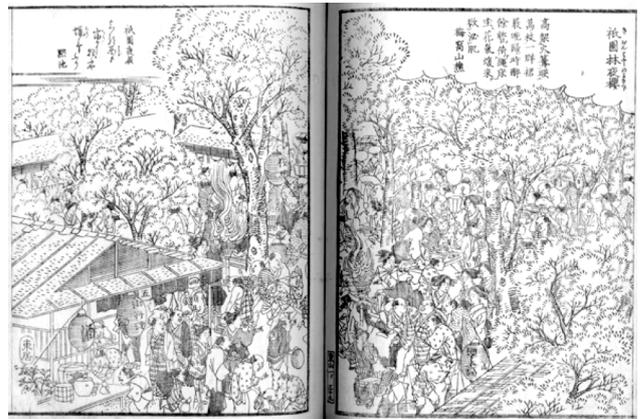


図4 祇園林夜桜の空間

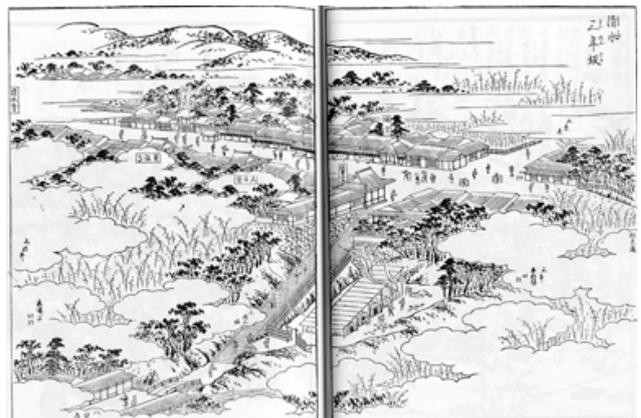


図5 産寧坂周辺の様子

また当時の紀行文を分析し名所巡りルートを割り出すことにより、当時の人々がこの地域を一つのまとまった空間として捉えていたことが明らかになった。

#### 4. 結論

江戸後期における対象地域は様々な性質をもつ空間の集合体であり、各部において独自の地形や文化的背景に基づくアクティビティが存在し、それを支える装置によって場が構成されていた。また核となる寺社境内からはじまり周囲に拡がる遊興の景域は、特に魅力のある空間構成を備えた部分（二軒茶屋や産寧坂）によって、全体の回遊性がまとめられていたことがわかった。

#### 参考文献

- 1) 『再撰花洛名勝図会』（京都大学付属図書館蔵 1864）
- 2) 『都林泉名勝図会』（柳原書店 1976.6）
- 3) 前掲『再撰花洛名勝図会』
- 4) 『拾遺都名所図会』（京都大学付属図書館蔵 1787）